

英一は飛び起きた。何故と云うでもなく、ただ意識が覚醒したと云う事実を信じられない様に。

……彼は夢を見ていないこと覚えていた。自分の記憶が城の五階から転落したところで途切れていると云うところで止まっていることを正しく認識していた。だからこそ、起きたと云う事実が信じられなかったのである。……彼は周囲を見回した。その部屋は真っ暗だったがそれは時刻が夜である故に光源がないからであることを夜闇に慣れた目が窓を認識して理解させた。ではこの部屋はどこだろうか。英一は懐を探ってライトを取り出し、点けて周囲を見回した。古びた調度と武具が残されている。その印象は丁度一階西の詰所を思わせたが、仮にそこであれば恐らく誰かしらがいる筈だろう。英一は直ぐには結論を出さず、自分が何故か寝ていた寝台から降りた。その傍に開かれた床の穴を見、直感的にこれが地下通路に通じていると感じて直ぐに壁を探ってレバーを探し、これを閉じた。それで漸く人心地付いたと云う気分にもなる筈だったのだが。

「英一くん……」

奏美の声がした。いやにそれは幽鬼めいた印象を覚えさせた。英一はライトを向ける。そこには光を向けられているにも関わらず顔の映らない奏美らしき者の姿があった。ほぼ直感で英一は偽物だと断じた。

「お前……」

「英一くん、どこ行つてたの……私、心配してたんだよ……?」

奏美の影はそう言うとおもむろに服を脱ぎ始めた。は、と英一は一瞬思考が停まる。いとまたやすく男の前で奏美の影はセーラー服とスカートを脱ぎ捨てて下着姿らしきものとなった。闇の内に照らされるそれはいやに妖艶とも映るものだったが、英一はそれに何かを感じていることが出来なかった。ただ沈黙と動揺だけを意識に渦巻かせている。奏美の影はさながら普段より肌を重ね合わせた恋人に歩み寄る様な、異様な自然さで英一の元へ近付いてその手をして彼の顎に触れる。ひやりとした感触を英一は感じてぞっとした。

「やつ、止めろ、近付くな!」

「英一くん……私……」

奏美の影はゆつくりと、見えない顔を近付けて来る。英一は金縛りに遭った様に動けなかった。どうすればいいのかすら彼の思考は満足に働かない。ただ脂汗を掻いてこのままではいけないと云う認識だけが反芻していた。……扉が開かれる音がした。

「英一くん!」

外より奏美の声が聞こえた。それと共にライトが彼と奏美の影に当てられる。英一は何故だかこれには体が反応して光から腕で視界を覆った。奏美の影がくると振り返って声の主を見、くすりと嗤った。影は忽ちの内に溶けて消えてしまった。自らに駆け寄る姿を英一は見る。それは今度もまた奏美であった。これに抱き付かれた時、その温もりから本物がやって来たことを英一は知った。

「心配、したんだから……どうしてこんなところにいたの?」

「いや……分らない。色々あって、気が付いたら、ここに。……そう云うお前は どうしてこんな夜中に独りでいたんだ?」

「え? えっと、何だか眠れなくてちょっと起きてたら、部屋の外から誰かがわたしを呼んだ気がして、廊下に出たら……小さい子供みたいなのがわたしを見てて、その子を追って来たらここに……」

奏美にはよく見えなかったと云う具合らしいが、それは翼なのだろうと英一には思われた。あの五階での出来事の後、更にこんな手回しをしてくれるのはどうしてなのだろう。あの子は何を考え、何を求めているのだろう。英一は知りたくはあったが、今まで会った翼は一言も発するところがなかったのを思うと伝えることは期待出来ないのだろうと考えざるを得なかった。

「ところで、英一くん……さっきの……」

「あ、ああ……その、ごめん……」

「その、謝らなくていいから。あれ、多分……わたしの、偽物だよ」

「多分……な」

ここで俄かに沈黙が漂った。奏美は英一を見上げ、どこか情に潤んだ瞳をしている。……奏美と云う女は大人しい方であり部内、また放課後や休日ともくればいつも付いて回っている相手である英一に好意を寄せていると云うのは凡そ周囲には見え透いたところがあった一方、英一当人は同じく共に歩んできた月子への遠慮でもあったのかあまりこうした奏美の心情に真っ向から応えると云う態度を示して来たことがなかった。ぬくぬくとした三人組の関係性を壊すことに繋がりがかねない点を英一にしろ奏美にしろ認識していたもので、それ故にどこか牧歌的な仲の良さに包まれた奥手な二人とそれを微笑ましく見守る一人と云う構図が長らく続いて来た訳だったものだが。奏美は今しがた消えた己の影の背中を見て、その姿に感じざるを得なかったものだった。誘惑の必要性を。何よりこの明日さえ知れぬ時間を共に過ごす今を前にして、悔悟を残したくないならばと。

「英一くん……」

ゆつくりと奏美はその顔を近付け始めた。その含意は実に乙女の発想から来ていた。なのだが、彼女が見落としていたことがあった。己の身体を、セーラー服越しにも伝わる豊満で瑞々しい四肢を彼に押し付けていることが何を齎すかを。それが実に男の勃起、単純に相手の魅力に惹かれてしていると云うことならむしろ物事は丸く収まった筈だった。英一は、正に奏美の影に、またこの奏美に勃起していた。その事実が彼に幾つかの情景をフラッシュバックさせた。初佳の最期、累の死に目、そして月子が被ったであろう仕打ちと云った衝撃。その暴力と蹂躪。そこで感じたものはただの恐怖ではない。己が男であることが常にそうした異性を傷付け、再生不能なまでにずたずたにする惧れを理解させられたが故のものだった。この上小春が最期に求めようとしたものが彼に思い出された。その言葉さえ伝えきれなかったのは何より己の力の及ばなかったところではないか。その程度の存在でありながら、異性を当然の如く恣にし、淫らな欲望で穢し上げることだけは一丁前に叶う低能な暴力性。

「！！」

英一は衝動一つで奏美を突き飛ばしてしまった。彼は無自覚にそれを行い、その事実には愕然としながら奏美を見た。奏美は自らが突き飛ばされたことを一瞬理解出来なかった。暗闇の中でばちばちと瞬きを幾度かして、漸く自分が拒絶されたことに気付くと彼女は絶望すら浮かんだ泣き顔を浮かべた。

「あ、あ、あ……、あああああああああ……！！」

奏美は戦慄いて、ずっと部屋を飛び出していった。英一は手を伸ばしてこれを引き留めようとしたが、声が出なかった。何故だ？ 彼はその背中に掛ける声の無きことに疑問を呈する。胡乱な、無意味な疑問だった。英一はぐるぐると空を切ったままの腕を伸ばしっ放しにしてこんなことを暫く考えて、突然にぎりと音でも立てそうな調子で周囲を見回した。さながら思考が再起動を求めたが故にそんな動作を必要としたのだった。彼はそれで漸く一度振出しに戻って、奏美が走り去っていった事実を見つめ直す。

「俺……なんて、ことを……」

遅過ぎる認識だった。どう云う内心や理由があれ、こんな形で拒絶を示して奏美が傷付かない筈がなかったのを洞察しないままにこんな行いをしたのはあまりにも情けない、最低の行いに外ならぬと英一は自省にもならぬ考えを抱いた。そうでなくともこの夜中に城内を独りで出歩かせて無事に済む方がおかしいことが分かり切っておきながら……。英一は痛恨に半ば呻きながらも寝台を離れて部屋を出た。静まり返った廊下をライトが照らす、転がった誰のものとも知れぬ屍以外は何も見当たらない。英一は動悸を感じながら走り出した。今彼は《捕食者》相手には用を為さぬと廊下に放り捨てた剣すら持たず身を守る武器もないのだが、そうであっても奏美をそのままにしておく訳には行かな

かった。許してもらえないとしてもせめて詫びて、最低限片が付くまで守らなければと。廊下はどうも一階の東側である様に思われ、英一はどう逃げたのかも分からぬ奏美を探して北側から西へ走り、そこから南を見たが何も見当たらず何も聞こえない。すると、幾つかの部屋に逃げ込んだのでなければやはり階段か。登るべきか降るべきかを一瞬考えた彼は、上よりもすぐに確認が終わると云う考えから地下へ降りた。階段を降り、T字路の半ばに達した時、誰かが泣くのを堪えるのが英一にも聞かれた。彼は南側を照らす。そこには奏美を優しく抱き締める月子の姿があった。

「つき、こ……お前……」

「英一……奏美を泣かせちゃったのね。でも、一回位そう云うことがないと、あんたたちっていつになっても前に進まなさそうな氣もしてたのよね」

月子の腕に抱かれる奏美が怯え交じりの目で英一を見たが、それを月子が優しく頭を撫で、諭す。

「怯えなくていい、あいつはただ少し心の準備が出来ていなかっただけよ」

「でも……でも、ぐすっ、……」

「ほら、ぐずらないの。あいつはあんたを探しに来たのよ奏美、あのバカが襲いに来たってのなら私が張っ倒すけど、そうじゃないんだったらちゃんと、向き合ってやって」

実の姉の様な優しい所作をして月子は奏美を説く。奏美はそれで漸く、少しだけ泣き止んで恐る恐る英一を見ながら一步一步歩み始めた。その後ろを手で背中を押してやりながら月子は続く。この間英一はどこか心の焦点が合っていない様な、自らがどう応対するべきなのか頭の回らぬ間抜け面を晒したままに二人を待った。奏美がそうして、英一の前に立った。彼女が何か言う前にずっと月子が歩み出て、英一の額に手を伸ばした。べち、と小さな音が鳴った。

「いっ？」

「ほら英一、ごめんなさいよ。この子を泣かせたこと、ちゃんと謝りなさい」

月子がデコピンを一発見舞って、そう生真面目な顔をして言った。少しでもだけ困惑してこれを見た英一ではあったが、本来その為にこそ来たものだ。彼は奏美に顔を向けた。まだその上目遣いには破局への怖れがどこか滲んでいる。こんな顔を本来させていい相手ではないのだ、と英一は自戒を思い抱く。

「奏美、……さっきは、その、ごめん。思い出したくないことを思い出した拍子で、間違ったことをしてしまった」

「英一くん……そのね、わたしも……悪かった、から。あんな場の勢いじゃいきなり過ぎて、訳が分からなくなっちゃう、よね」

「あ、いや、それはいいんだ。お前は何も、何も悪くないから」

「そんなこと……そんなこと、は……」

「……」

「……」

「なあ奏美、……お前が、さっきして欲しかったことって」

「え、ええと、その、言わなくて、いいから、恥ずかしい……」

顔を赤くして奏美は俯いた。顔が赤いと言う点では英一も大差ないので、傍らで二人を見守る月子にはただただ微笑ましいと云う表情が浮かんでいた。間が空くことをどこか恥ずかしがった英一は一旦視線を逸らしながら、どこかそれを口にするだけでも途方もない労力を費やしている感覚でこぼす。

「奏美……よければ、さっきの、つづ、き……」

「……」

「……」

見つめ合う男女の青臭い沈黙。青臭いと書きながら当人らは真っ赤になっっているのだ。この夜の地下と云う暗闇の中において。月子以外の者が見ていたなら無粋な程に笑い出しても不思議はなかった

だろう。――ふっと、奏美がどこか心を決めたように瞼を閉じ、ふわりと顔を近付けた。すつとそこへ英一の方も落ちて来る。柔らかな感触をお互いが感じた。ここ数日良いものを食べられてもいないし身繕いとして最低限度しか行えてなどいないものだから少しその唇は互いにパサついた、乾いたものではあったものだが。それでもその感触と互いの口から伝わる穏やかな温もりがこの瞬間だけは二人に幸福を思い抱かせた。ふっ、と月子が苦笑しながら鼻を鳴らした。それでどこかぼんやりとした数瞬は過ぎ、二人はどちらともなしに顔を離れた。お互いが、相手が真っ赤なままだと思った。

「おめでとう二人とも、これでやっとスタートラインに立てたわね」

「え、いや、えーと……」

「つ、月子ちゃん……」

「ごちそうさま、見てるこっちが胃もたれしそうだったわ。このまま適当な部屋に押し込んで乳繰り合って貰うのも悪くはないと思うけど、それはそれとしてあんまり私を夜更かしに付き合わせないでくれると助かるかしらね」

「あ、ああ、そ、それじゃ、みんなのところに戻ろうか」

「う、うん、早く戻ろう。何が出て来るか分からないし」

「……」

僅かにこの時月子がどこか物憂げな、還らぬものへの悔恨を映した様な儂い笑みを浮かべた表情をして二人を見たのを英一は認めた。優しさを振り撒き続けたこの女の示すところに英一はどことなく見当が付いているのを感じないでもなかったが、それどころではないとか奏美との関わりで頭が一杯だとか、ともかく尤もらしい理由でそのことを考えることを彼は止めた。三人はそうして地下から一階へ戻り、西の詰所に辿り着く。未明の今、残っている面々は誰も起き出してはいない。そう思うと翌朝唐突に月子が戻って来ていると驚かれる様には思われたが敢えてこの期に及んで彼女を部屋の外で待たせる由もない。寝台は元々奏美と游次郎が使っていたので、そのまま雑魚寝をしようとする月子を奏美は誘って二人で寝台を使うことにした。数日満足な寝床さえない生活をしていた月子への奏美の労りに対し、論駁も皮肉もなく闇の内に微かな微笑を浮かべてこれに従った。

「少しだけ……あなたの温もりを感じさせて……。もう他の誰にも頼める歳じゃないから……」

やはり疲労を隠していたものだった。奏美にこう月子は寝台で囁いて、彼女を背中から抱くように寝転ぶ。この時奏美は月子を少しだけ冷たいと思ったものだ。人としての体温を保ちはしているが、苦労が続いたからか冷えていたのであろう。英一はそんな二人の寝台を背もたれにする様に座って、改めて眠りに就こうとする。

「……帰って来れたのか」

囁く様な低い声が三人に聞かれた。それは游次郎のものだった。彼らが何かを考える暇もなく游次郎は力の籠らぬ声で続ける。

「良かった、な。誰も彼もくたばる様な現状で、無事だったってのは」

「先輩……起きてたんですか」

「満足に、眠れないままなんだよ……痛みが引かないから……。瀬之川がひっそり、出てったのは気付いてたが、このザマだから何もしてやれなかったからな。少し……安心した」

「どうか安静にしていって下さい正雁先輩、わたし、これ以上誰かが死ぬのなんか……見たくないです……」

「そうだな……俺もそう思うが……、段々、力が入らなくなってるのを、感じるよ」

「そんな……」

「俺のことは……いい……お前らは、自分たちが、生き残ることを考えろ……」

「……すみません、ご心配をお掛けしました」

「霧海……お前が死んだら瀬之川が、寂しがる。葦杜も無念だろうから……よく帰って来たな……」

「……」

「後のことは、明日に考えよう……俺も、なんとか、寝る……」

部屋は再び静寂が支配した。ただ寝息だけが聞こえる。外は小雨が降っていた。そのしとしと云う音を子守歌にする様に彼らは眠った。

翌日目を覚ました面々は月子の帰還に驚き、しかし歓迎を以てこれを迎えた。彼女は語る。《哄笑する女》から逃れようと地下に逃げ込んだ際にそれまで開いていなかった扉が開いていたのを見てそちらに駆け込むとそのまま扉が独りでに閉まって鍵が掛かってしまい戻れなくなったと云う。その部屋には更に地下へと続く階段だけがあり、意を決して降りたその先はどうやら監獄の如き区画だった。「でも、あそこは近付くべきじゃない。牢獄の中には幾つもの拷問器具が見えたわ。罨さえ仕掛けられていたから一歩間違えば私の命もなかった」

そう滔々と月子は口にしながら水で溶かしたビスケットを口にする。地下監獄では残っていた水以外何も口にする機会がなかった為に彼女は極度の空腹をまず一同に訴えており、飢餓的な状態に万が一を懸念した健が肉の詰まった缶詰を与えるより慣らしの食事を先にした方が良くしてこの様にふやかされていた。

「晩の内に気付くべきだったな……」

「いいのよ。あの時は監獄からやと出て来れたばかりのところだったし、真っ暗な夜にみんなを起こしてご飯をねだるのも迷惑でしょう？」

「君はもう少し他者を気遣う以上に周りに我が儘を言っている、霧海さん。……しかし、どうやって勝手に閉まったと云う入口から出て来れたのかね？」

「奥でスイッチを操作したら何か開いた音がしたから道を辿って戻ったら開いてたんです。その道すがらで、これも見つけました」

靴から月子が取り出したのは見慣れない機械の一塊だった。それは実に健が探し求めているであろう時空間転移マシンの部品らしき品で、すぐさまこれを借りた彼は資料と突き合わせてそうであることを確かめた。

「お手柄だ、これで必要なものは全て揃った。後はマシンを復旧し、駆動させるだけだ」

「危険を冒した甲斐がありましたか。それで、嘉尾教授。どうやって二人乗りまでしか出来ないマシンで私たち全員をここから脱出させるのですか？」

思えばそれを質す者はこれまで存外いなかったものだ。月子の真剣な問いにまた健は応える様に真剣な顔をしてこう言う。

「読み解いた資料によると、時空間転移マシンは搭乗者を転移に際し物理的・空間的に保護する為の保護フィールドとでも言うべきものを発生させる。本来の設定ならこれはマシンを覆う程度の範囲だし乗れなかった人がマシンに張り付いて無理矢理一緒に転移するのは転移中の状況が不明な我々には危険過ぎる。そこでマシンの保護フィールド発生機関を調整してフィールドを拡大する。これをすると思らく周辺空間を挟む様に転移が行われるので、我々はマシンに括り付けられてさえいれば諸共に転移可能となる筈だ」

「なる……ほど？」

「はい、それで漸く帰れるんですかね。でもこの子ら、首都圏の子たちでしょ、俺と教授はそもそもG県で遭難した訳で、帰る着く場所はどうするんです？　そもそも指定可能なんでしょうか？」

「それに関しては日本国内、まあ僻地の無人島とかでなければ上出来だと思っしかなだろう。幾らか調整方法は読み込んだが、これを建造した当人は北米を起点としていたからな。向こうのどこかに流れ着く可能性もある」

「そうですか……国際電話繋がんのかな。と云うか不法入国で逮捕されるかもしれないのか」

「その辺りは出たとこ勝負だよ。公衆電話の一つも見つけて両替が出来れば何かしらは方途もあると思っておこう」

「両替かあ……本来はキャンプだったからあんま持ち合わせがないんですけどね」

兼輔がぼやきながら懐の財布を取り出した。使う由も捨てる場面もなく持ち続けたそれを少し懐かしそうに開いて、中から五百円玉を取り出した。銀色の大きな一枚。それを見て英一は珍しそうに声を上げる。

「あれ、珍しいですね。昔の五百円玉持ってるなんて」

「昔って、確かに近年新しいのが出回り始めたがまだ五百円つつたらこの銀色のやつが馴染んでる人が殆どだろ」

「え？」

「……うん？」

お互いの認識の齟齬を英一と兼輔は感じて怪訝そうな顔を投げ掛けかけあった。これを見た奏美が思い付いたように自分の財布を探し、その中から五百円玉を取り出す。外周がほんのり金色めいた色をし、内周が白く見える新しい硬貨を。これを見た兼輔が益々困惑した調子で言った。

「何だそりゃ？ この半年そこらでまた新しい五百円玉が出たとで……いや、何だその、令和って年号は……？」

「令和って、今の年号で……」

「ねえ坊之威さん」

月子が英一を遮る様に兼輔に呼び掛ける。彼は何故だかその言葉の先を予見したような気がして、ごくりと唾を呑み下ろした。

「今、西暦で何年でしたか？」

「西暦……二〇〇一年、だ」

「成程な……湖の辺りで行動を共にしていた時も妙な違和感があったものだったが、そう云うことか」

健が納得した様にそう呟いた。英一や奏美、それにこれまでどこかの空な風で聞いていた紹は直ぐには理解が及びかねていたが、月子がそんな彼らに代わって話す。

「私たち、逍道学園美術部の面々が合宿の為にA県へ向かったのは西暦二〇二六年なんです。けれど嘉尾教授が研究室生を連れてキャンプに出たのは二〇〇一年。たまたまどちらも夏の内だったから齟齬が出にくかったんでしょけど……私たち、帰る時代が異なりますよね、これ」

えっ、と云う声が幾つとなしに出た。それまで寝台の上でじっとしているしかなかった游次郎さえ動揺を浮かべながら月子の方を見ている。次の句を続けたのは健だった。

「そう云うことになる。どうやらこの一帯には、異なる時代のもの同士でさえ流れ込んで来る性質があるらしい」

「じゃ、じゃあ教授、俺らはどうすればいいんですか！？ 二〇〇一年と二〇二六年のどっちに帰るか、いやそもそもそのどちらかにさえ帰り着けるんですか！？」

「落ち着きたまえ。差し当たりマシンが移動可能なのは一度に一つの時代のみだが、マシンが正しく駆動し続けさえするなら片方の時代に辿り着いた後もう片方の時代へ飛べばいいだけだ」

「だっ、だったら、まずどっちへ……？」

「……二〇二六年に向かうのが妥当だろう。我々は寿命さえ続いていれば二十五年後にもいる筈の存在だが、この子たちは二〇〇一年にはまだ生まれていない。そうだろう？」

「ええ、その通りです」

「であれば、余計なタイムパドックスの類を発生させてこれ以上不測の事態に直面する可能性を増やすよりは先に我々にとっての未来へ飛び、然る後に我々の時代へ帰る方が安全だ」

「……、すみません、取り乱しました。確かに教授の言う通りです」

兼輔が俯く。誰にとっても少なからず信じ難い話ではある以上、この時の内にそうした話をし、話をまとめておけたことは幸いな方だと言えるだろう。一応英一も冷静になる様自らに促しながらそう考えるのだが、やはり不安を覚えない訳には行かないのだった。

食事と支度を終え、面々は中庭へ移動した。瀕死で益々弱っているとは云え置いて行く訳には行かない游次郎は大人二人が肩を貸す格好で歩く。その先頭を英一は守るのだが、中庭の入口に達してその視界の先に認めた相手にどこか必然を覚えざるを得なかった。侑人が時空間転移マシンを背に座っていたのである。

「甫土先輩か……」

「葦杜、それに生き残りのみんな総出って訳かな。いいなあ賑やかで」

「野郎、この期に及んでまだのうのうとした態度でいやがるのか」

「はあ、全く。胡散臭い大人二人も、偽物共に取り囲まれていると思えばむしろ馬鹿じゃねえのって感じかな」

侑人が立ち上がってゆくりと歩み始める。その後ろから初佳と奏美の影がマシンの傍らよりぬっと姿を現した。初佳の影は当然の様な仕草で侑人に絡み付き、奏美の影はその隣で微かに首を傾けながら英一たちに妖しい笑みを投げ掛ける。初佳の影が言った。

「この出来の悪い映画のセットみたいなガラクタで、何をしようと言うの？」

「悪いが君たちを連れて行くことは出来ないよ、お嬢さん方。誰かしらに擬態した影と云う人ならざるものを、こんな忌まわしい場所から出す訳には行かないからだ」

「あー、この初佳こそが本物ですよ、あんたの目は節穴なの？ 瀬之川さんだって折角真正正銘の本物を連れて来たつてのに、大の大人が出鱈目こいてると信用失いますよ？」

「俺たちはあなたとその話を延々する為にここに来た訳じゃないんだ、大人しくどいて、俺たちの目に付かないところに引っ込んでいてくれないか」

英一は歩み出て剣を握った。ちゃんと後で他の面々が回収してくれていたこの武器をしてなら彼は侑人に負けるとは思われなかった。……侑人はこんな英一をどこかうんざりした目で見、くつくつと嗤い出す。

「おいおい偽物さんよ、昨日は頑張ってデカブツから逃げ切ったからって、自信付けてるのか？」

「……あんなものを駆り出せる相手を連れているとしても、俺たちはあなたに取り合っている暇はないんだ。どいて下さい」

「はっ、本物の葦杜ならこう言うって？ 本物なら……俺に刃を向ける訳、ないだろ……あいつは恩知らずなんかじゃないんだから……」

言い聞かせる様な執着を侑人はこぼし、初佳の影をどこか血走った目で見た。くすりと、嗤いが返って来る。――ぞわりとした悪寒が辺りを覆った。またしても何か来る、と英一たちに直感させる。游次郎が蒼褪めた顔を上げ、しかしその表情は怒気とも決意とも付かぬものを宿して彼は己を支えていた二人を振り解いて自ら立った。痛苦によるめきながら彼は懷に仕舞われた銃を取り出す。

「茶番は……いい加減にしろ！！」

……その怒声に続く筈の銃声は聞かれなかった。游次郎は引き金を引いたつもりだった。ふと見ると自らが手にしていた筈の銃が影も形もない。

「先輩、こんな危ないもの持ってちゃ駄目ですよ？」

いつの間にか隣に立っていた奏美の影が銃を摘まんでいた。それを驚愕の目で一同は見る。奏美の影は嗤いながら銃を片手で構え、游次郎の頭目掛けて引き金を引く。今度こそ鋭い銃声が鳴り響いた。侑人が舌打ちをする。游次郎は月子に突き飛ばされる形で凶弾から逃れていた。

「だけど、もうお前らは終わりだ……!」

泡立つ闇が現れ、そこから《黒い人型》と《哄笑する女》がずると姿を現す。その無貌。その朽ちた顔。多くの獲物を一瞥し、やはりゆると歩き出す。英一はその前に立ち塞がった。己が守らずして誰が守ると云うのか。彼の無我夢中な決意に対し、まず《黒い人型》が向かう。英一は剣を振りかぶって斬り掛かった。それを《黒い人型》は避ける仕草さえせず、ただ片腕を宙に突き出す。

「!？」

刃は片手で掴まれていた。ぎちぎちとした力の撓め合いは徐々に英一が押され始めていた。とんでもない怪力だった。英一が屈するが早いか、剣の方が折れるのが早いか。その局面の傍をすつと抜けて《哄笑する女》が紹目掛けて飛び込んだ。紹はともかくも自らの得物たる鉄をこれに突き立てたが、肉を裂く感覚を与えられた《哄笑する女》はそれにどこかいたずらでもされた様な顔をして傷口を見、そこからじろりと紹を見上げた。焦点を結んでいないかに見える昏い瞳に捉えられた時、紹は久しくそんなことをしていなかったことをした。絶叫を。

「アああああああッ!!？」

鉄など取り合わずに紹は空いた手をして《哄笑する女》の顔面を殴り付けたが、やはり向こうは痛痒たる感触も示さず逆にその手が彼の片腕を掴んだ。その腐肉からどうすればそんな力が湧くのか、紹は曲げられない方向へ腕を曲げられてその痛感にまたひとたび絶叫を上げる。兼輔は折れた槍の先端部をして奏美の影を牽制しているが、当の影はくすくすと嗤いながら銃を放り捨てて彼を見る。あまりの余裕の程に兼輔は迂闊な手出しに躊躇が及び、相手の出方を伺うことしか出来ない。

「アハハッ、いい様だなお前ら。ま、精々惨めにくたばってくれよ。だってこれは正当防衛だもんね？」

侑人の余裕は全く腹立たしかったが、事実太刀打ち叶わない状況だった。英一は思い切って剣を捨てて《黒い人型》を躲した。それで剣が地に転び、相手も俄かにたたらを踏む。英一はその脇腹目掛けて肘打ちをぶつけた。そこへ好機と見た月子が更に体当たりを背中側から試みた。打撃は確かに相手をのけ反らせる。……だがこの無貌の存在はそれに痛苦を示すところも感じさせず、直ぐに体勢を整えて英一と月子に向き直った。捕まったら負けの勝負なんて! そう英一が焦燥を思い抱いた矢先、《黒い人型》が急に振り返る。その先には奏美があった。明らかに窮地に立たされている味方に怯えている。まさか、と思ったその瞬間には《黒い人型》は走り出していった。英一はすぐさまこれを追う。奏美は自らが標的となったことへの反応が遅れ、その魔の手を逃れられなかった。

「あがつ、や、やめ……」

《黒い人型》は片手で奏美の首を掴んで持ち上げていた。ぼさりと奏美の鞆が地に落ちる。英一はこの敵に組み付くが、それを片腕で応じる相手に振り払われて止めることが出来ない。見れば紹は《哄笑する女》に組み伏せられており、兼輔は奏美の影に槍を突き出したのを避けられて逆に足を引っかけられ地に転び、その拍子に武器を奪われている。健は歩み寄る初佳の影が指さしたところ金縛りに遭ったかのように強張った顔をして硬直していた。この中で地に臥せていた游次郎が立ち上がり、ぎろりと激しい怒りを示しながら侑人を見た。侑人はそれをぶつけられて一瞬だけたじろいだ

が、直ぐに余裕そうな顔に戻る。

「お前が、こんな見下げ果てた、男になるとはな。このままに、してられるか……っ!!」

よろよろと、しかし徐々にありつたけの力を振り絞って游次郎は走り、その拳を叩き付けた。しかしあまりに、あまりに遅すぎる。その一撃は易々と侑人に躲され、氣力を振り絞ってもう一発と繰り出した拳もまた空を切った。

「やめてくれよ、死に損ないみたいなふりすんの。お前も正雁の真っ赤な偽者の癖によ」



一つ蹴りを叩き込むと最早興味を示す価値も無いとばかりに視線を外して他の面々を見た。

「このっ、放せ、このっ!!」

無我夢中で殴り付ける英一をちらと《黒い人型》は見、その顔面に鉄拳を叩き込んだ。意識を手放さなかっただけ大したものだと云うべき鈍痛が彼を襲い、大の字になって地に崩れる。雑魚が漸く抵抗を止めた、とばかりに黒い人影はその鉄拳を叩き込んで空いた手をして、苦悶に喘ぐ奏美のセーラー服の胸元に手を掛けた。縦に引き裂くつもりだ、と英一は直感したが己は目下何も出来ない。止める、と呻くことが精々の惨めな敗者。

「いや、や、やめ、えぐっ……」

奏美の苦痛は最後の一幕として掛かっている無力なヴェールを思わせた。び、と布地が破ける音が始まる。……その音は続かなかった。代わりに、雷光の閃く轟音が鳴り響いた。え、と誰もが思ったものだった。英一は顔を起こして見た。《黒い人型》にまわりつく様な稲妻の縛めが掛けられ、声なき絶叫に喘ぐその化け物の姿がある。その背後、奏美の更に後ろに月子が魔道書を開いて立っていた。冷たく、鋭く、深い怒りに満ちた顔をして。

「消えなさい、悪夢の欠片。今まで散々好き勝手してくれたお返しよ」

耐えかねた《黒い人型》が奏美を手放し、彼女が地に落ちると更に月子はページを捲って次の魔法陣をなぞり上げた。天より一閃が瞬き、《黒い人型》に直撃する。その瞬間より後に、これは形を保っていないかった。ただその跡地に微かな塵だけが残っていた。これには侑人も仰天したところを隠せず、焦りを含んで初佳の影を見る。影は彼ほどに驚いてこそのいなかったが、俄かに口を開けて呆然としていたように思われた。これは奏美の影も同じで、その僅かな隙を兼輔は見逃さずに飛び上がって影より武器を奪い返し、直ちにその胸を突き刺した。手応えのあるともないとも思えぬ感触と沼を突き刺した様な音がし、奏美の影は崩れて消えた。

「ああクソッ、おれは、こんなどこでえっ……!!」

紹の抵抗は最早末期的な状況に直面していたが、形勢が覆り始めたのを見た月子はページを捲って次の魔法陣を発動する。それはバチバチと弾ける雷の矢で、一瞬の閃きの内にこれが《哄笑する女》を貫く。閃光の音と共に化け物の耳障りな絶叫が響いてのたうち回る。英一は立ち上がって剣を拾い、どっと駆け寄って女の首に剣を突き刺した。腐肉と腐血が飛び散って、しかし黒ずんで消える。英一は何も考えずにその剣を回し、骨諸共に首を振り切った。千切られた《哄笑する女》の首は尚も絶叫を続け、胴体はびくびくと痙攣を起こして跳ね回っていたが、十秒と経った頃にはまず胴が停まり、首は遂に発する声すら失ってただ中空を胡乱に眺めるだけとなった。そしてそれから間もなく《哄笑する女》も灰が風に吹かれる様にして黒く崩れ、消えた。

「まさかまあ、こんな風にまでなるとはね。これは少し……癩かしら」

初佳の影が不機嫌そうに言った。英一たちが一齐にこれを見る。侑人は影と英一たちを交互に見て未だ状況が呑み込めていない様に困惑していた。影はゆるりと歩いて時空間転移マシンの傍へ向かう。「! やらせるか!」

英一が直ぐに飛び出してその剣を初佳の影へ突き立てんとする。これを認めた侑人は、そればかりは直ぐに意図を理解し半ば半狂乱の様子で英一の前に立ちはだからとした。

「やめろおとおおおッ!!」

「どけ!」

英一は剣の石打で侑人を一撃した。あまりにも呆気のないまでに吹っ飛ばされた侑人のことなど意にも介さず英一は初佳の影を見据える。影はマシンの傍らに手を付いていた。

「ねえ葦杜。私にはよく分からないけど、触っちゃいけない部分ってこの辺りかしらね?」

その手がずぶりと沈み、何か嫌な音がマシンの内部でしたのを皆は聞いた。英一は最早一言も与えずに剣を以てその影の胸を突き刺す。影はやはり嗤っていた。その昏い顔の下から一瞬だけ、愚者を

愛しむ様な目が見えた気がした。……影は崩れ、無に消えた。呆気ない程に。その手応えのなさは実に、憎らしい程悪夢的であろうと英一には思われた。

「お前、お前お前お前、何てことをしてくれんだよおおおおおッ」

侑人が猛然と、しかし魯鈍に英一に掴み掛る。その顔は涙と鼻水で崩れ見るに堪えなかった。本当に、この人はこうじゃなかった筈なのに。英一はただ憐れむことしか出来ない。壊れ切った果てに縋った、悪夢の内より生まれたものより目を醒まさせられて残るのは悪夢より絶望的な現実。英一にとり自らがこの様になることがなかったのは、或いはただ幸運に恵まれただけだったのだろう。決意を抱いたが故に死を前にしても恐れなかった小春や、どれ程苦節すれども望みを捨てずに仲間の元へ向かって歩み続けた月子、後輩たちへの愛情から尽力し続けた游次郎らの姿と行為に、無自覚に背中を押されていたのだ。あいつらに応えなくちゃ、と。勿論、己が力及ばずともただ好きな人を慕い支えになろうとした奏美のことだ。

「あなたの、負けですよ、甫土先輩。俺が斬ったのは紛れもない偽物、ただの影でした。血も通わぬ悪夢のひとつかけに過ぎなかった。本物はもう、どこにもいない」

「うるせえ、うるせえうるせえ、うるせえんだよ葦杜ッ！！ あれはッ、ホンモノのッ、初佳だッ！！」

「もう本物がどうかなってどうでもいいですよ。それこそ噛み合いやしないことばかり言ってるんですから」

「うるせえー！ー！ー！ーッ！！ お前、お前エ……殺してやるうッ！！」

侑人は英一から剣を奪おうとしたが、英一はそれを見て取るとすぐに剣の腹をして侑人の頭を軽く叩いた。それでも相当に痛いのだ、元より金属の長剣なのだから。侑人は悲鳴を上げて転がり、英一はその隙に悠々と歩いて彼から離れた。この惨めな男を続々と生き残った面々が取り囲む。中でも紹は明らかに怒気を孕んでいた。

「おれはもうあんたを先輩って呼ばねえぞ、甫土。お前のお陰でおれも死ぬとこだったんだ」

「うるせえ、うるせえ……初佳は、初佳は生きてるんだ、俺のモンなんだ……お前らなんか奪われる筈がないんだ……」

「ンな話してねーよッ！！」

蹴りが飛び侑人の横っ腹が突き上げられた。情けなく地面を転がるこの彼に誰も手を差し伸べない。奏美の可哀そうなものを見る表情、月子の冷たい視線、兼輔の侮蔑も露わな顔、健に肩を担がれる游次郎が投げ掛けるただ手遅れの相手に対する諦念、それらのどれもが侑人を傷付けた。他者を傷付けた代償を支払わされる苦しみを、少なくとも己が身で知らずに済むならそれに越したことはあるまい。あまりにも無惨だけが転がる存在にどうして当人さえなりたいたいと思う者があるう？ ……面々の（本来ならその重みに耐えかねる程の）軽視に侑人は泣きはらしながら、それでも胴を起こした。

「葦杜、お前だけは殺してやる、初佳の仇だ……ッ！！」

飛び出した侑人が中庭に転がっている何かを掴んだ。それは游次郎から奪われて放り捨てられたままになっていた拳銃だった。侑人は驚くほど滑らかな動作でその銃を両手で構え、英一の脳天を指した。奏美が悲鳴を上げるが早いかと云うところで引き金を引く音がした。

「……は？ あれ、何で……」

侑人は繰り返し引き金を引いたがただチキチキと音が鳴るだけで何も放たれない。游次郎が流石に憐みを伴った声で、意趣返しの様に嗤って言った。

「最後の一発、だったんだよ。あの影が撃ったのが、な……ごふっ！」

「う、う、う、あ、ああああああああッ！！」

自らが道化でいることに耐えられない侑人は狙いも付けずにその銃を己の敵目掛けて放り投げた。しかしこんな雑な投擲では何に当たると云うものでもなく、一応狙われた英一がずっと避けるとそれはただ軽い音を立てて地面に転がった。……また游次郎が咳と共に血を吐き、とうとう健に支えられてさえ立てなくなって膝を折った。それを見た紹がぎっ、と激怒した目で侑人を睨んで何かを振りかぶって投げつけた。それは持っていた鉄だった。銃はよく回って飛んだのに対し鉄は一直線にその切っ先を前にして飛んだ。それは侑人の首元に突き刺さった。この男の力が抜け、崩れ落ちるのを英一たちは見た。まるで自らが死に往くことさえ信じられないかのような顔をして、侑人は仰向けに倒れた。ぐずり、と音がして侑人の身体が崩れる。瞬く間にそれは跡形も残さず消えた。飛んだかに思われた血飛沫一つとして辺りには残っていなかった。

「あいっ……影だったのかよ」

紹がそう呟いた。彼としても存外納得のゆく話だった。一体初佳を殺した為に英一に制裁されて以来地下通路でどの様にすれば生き延びて来れたと云うのだろうか？ 真っ暗闇のあの地下通路にて、水源こそあっても食事には事欠く。侑人と云う人間はとくに人知れず死んで、影が自覚さえせずに成り代わって生者の如くこれを演じていたとしても何ら不思議はあるまい。尤も、鉄を投げ付けた時の紹は本気で殺すつもりだった。常人が生き残っていたなら止めただろうか？ 少なくとも紹にとってはその男はこの時に至って殺すに足りる相手だと信じられた。

「先輩……しっかりして下さい」

紹がどこか呆けた様子で死人の側を見ていたのに対し他の面々は倒れた游次郎の周りに集まっていた。ただでさえ調子の悪かった游次郎の顔色はいよいよ蒼白になっていた。

「悪いな葦杜、世話ばかり、掛けて……」

「そんなこと、正雁先輩の方にこそ俺たちはずっと助けられて……」

「最後まで、立ってられなかった。俺はその時点で、お前らの足手まとい、さ……。葦杜、生きろ。瀬之川と、霧海、それに瑚潑たちと。ああ、お二人にも、短い間でしたが、お世話に、なりましたね」

「お前も……生きて帰るんだろ。諦めんなよ」

「気に、しないでくだ、さい……俺より、可哀そうな死に方をした、他の奴らのことを、悼んでやって、下さい……」

呼吸が弱って行くのが誰の目にも分かった。おそらく内出血が酷くなっているであろう。そしてそれをどうにかする手はこの場に存在しないことは元より明らかだった。游次郎は昼を待たずに息を引き取り、彼と親しくした後輩らに悲嘆の涙を流させた。英一はその骸に顔を突っ伏すようにして、声を押し殺して泣いた。奏美もしんとしてしどに涙で頬を濡らしている。月子さえこの別離を前にしてはただ故人の前に座り込んで、鼻を吸りながら目元よりこぼれ落ちる涙の雫を拭っているほかなかった。大人二人は彼らをそっとして立ち上がる。そしてふと気付いた様に紹を見た。紹は游次郎の亡骸を無表情で見下ろしていた。

「君は……彼とは、あまり関わりがなかった方かね」

「……何でしょうね。悲しいとは、思うんですけど、何か、何も考え付かなくて。おれ、薄情だったんだな」

「いや、そんなことは……。ただ、多くのことに直面して、心が麻痺しているのかもしれない。全てが上手く行ったら、ゆっくり静養して欲しい。一度何もかもを忘れたような時間を過ごして、自分がどれ程傷付いたのかを見つめられるように」

「……ありがとうございます」

その役割を代行してくれて彼は心の中でこの恩師に感謝した。

最終更新二〇二六年八月十六日